

あいにぬきともみ
○會退友美, 赤松利恵 (お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科)

【背景・目的】 先行研究において、母親もしくは家族と朝食を共にすることは、子どもの食欲増進と関連していることが報告されている。また、朝食の孤食割合が近年増加していることや、幼児期の朝食欠食の問題をかんがみ、本研究では、幼児期の朝食共食頻度に関連する要因を検討することを目的とした。

【方法】 2009年9月、東京都内の幼稚園および幼保一元化施設(私立1園、公立9園)に通う園児をもつ保護者944名を対象に自己記入式質問紙調査を実施した。

目的変数である「幼児の朝食共食頻度」は、「家族がそろって食事を食べるのはどれくらいですか」の項目に対し、「ほとんど食べない」「週に2~3日」「週に4~5日」「ほぼ毎日」の4段階で評価させた。解析では、「ほとんど食べない」「週に2~3日」を「週4日未満」, 「週に4~5日」「ほぼ毎日」を「週4日以上」とし、2分して解析を行った。

説明変数として、生活習慣は「食事前に子どもに何か食べ物を与えるか」, 「食事時間の規則正しさ」, 「間食時間の規則正しさ」, 「起床時間」, 「就寝時間」をたずね、家族の育児参加は「祖父母が子どもの面倒をみるか」, 「父親が前向きに育児に参加しているか」をたずねた。

共変量として、子どもの性別、子どもの年齢、きょうだい数、母親の年齢、母親の就業の有無、夕食共食頻度を投入し、単変量・多変量ロジスティック回帰分析を行った。解析では、全てPASW Statistics 18を用い、有意水準は5%とした。

【結果】 回答者は、557名であり(回収率59.0%)、その内回答者が母親であった541名(適格率97.1%)を解析対象とした。子どもの

性別は、男児264名(49.2%)、女児273名(50.8%)であり、平均年齢は4.5歳(SD1.0)歳であった。

生活習慣の要因のみを投入したモデル1では、食事時間が規則正しいこと(OR: 2.48, 95%CI: 1.20-5.14)、間食時間が規則正しいこと(OR: 1.90, 95%CI: 1.24-2.92)、起床時間が7時前(OR: 1.92, 95%CI: 1.27-2.90)、就寝時間が21時まで(OR: 1.63, 95%CI: 1.06-2.50)の要因が、朝食共食頻度が高いことと関連していた。

また、家族の育児参加の2項目のみを投入したモデル2では、父親が育児に前向きであることが関連していた(OR: 1.74, 95%CI: 1.11-2.71)。

最後に、モデル1とモデル2の全ての要因を投入したモデル3では、食事時間が規則正しいこと(OR: 2.31, 95%CI: 1.11-4.82)、間食時間が規則正しいこと(OR: 1.89, 95%CI: 1.22-2.91)、起床時間が7時前(OR: 1.91, 95%CI: 1.26-2.90)、就寝時間が21時まで(OR: 1.67, 95%CI: 1.09-2.56)の要因は、モデル1と同様の傾向を示し、父親の前向きな育児参加の関連はなくなった。

【考察・結論】 本研究から、朝食共食は規則正しい生活習慣、父親の前向きな育児参加が関連していることが示唆された。

幼児期に関心がある方をはじめ、様々な分野の方のご参加、ご意見をお願いします。

(連絡先)

會退友美(g0970501@edu.cc.ocha.ac.jp)

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

お茶の水女子大学大学院

人間文化創成科学研究科 赤松利恵気付

Tel&Fax: 03-5978-5680